



家康公の人材登用法

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねなり



臣、北条家臣を御先祖にもつ方が多いのには驚かされます。

もつともこのことは三河松平八代に仕えて苦しい時代にも忠節を尽くし、多くの犠牲者を出しながらひたすら「御家」を支えてきた三河譜代の武士たちには納得しかねる面もありました。頑固一徹、武辺一筋の三河武士であった大久保彦左衛門は、憤慨のあまり次のように書いています。「世に知行を多く採り、立身出世するには次の五条あり。一、主君(旧主)に弓を引き裏切る人間こそ知行を取、末も栄え孫子の代まで繁盛す。二、卑怯な振舞いを為して人に笑われた者。三、礼儀作法を良く弁え御座敷内で上手く立ち回る者。四、算盤勘定上手で代官役が身に付いた者。五、何処の馬の骨とも解らぬ者。しかし知行を求めてゆめゆめこの心持つべからず」。

多くの民間人を起用しています。このことが、まったく新しい、民間の活力を中心とした江戸時代を作り出した大きな要因だと思います。

もともと家康公はその勢力が拡大するたびに、次々に新しい武士を登用しています。三河武士は一番古い譜代で徳川家臣団の中核となる家臣ですが、合戦で領国が広がるたびに新しい人材を得て強力な軍団を築いてきました。武田家を滅ぼしたとき、信長公は徹底的な落ち武者狩りを命じました。一方、家康公は、信濃滞陣をのぼして、出来るだけ多くの武田家臣を召し抱えたと伝えられています。

私の関係する団体に旧幕臣の子孫の会「柳営会」があります。武家作法の研究や武家茶会の開催、御先祖の事跡の研究などを行っています。元今川家臣、武田家

秀吉公没後の家康公の行動をみるときに、長年の辛抱強い律儀な男が一変して自信に満ちあふれて、自由闊達、奔放といえるほど伸びやかに物事を進めている印象を受けます。五十七歳から七十五歳までの約二十年間に、それまでに得た人生経験と知恵のすべてを注ぎ込んで新しい平和な日本を作ることに没頭された結果だと思います。

信長公が古い権威を壊し、秀吉公が地侍勢力を一掃したあとに、家康公が圧倒的に強い軍事力を確立して平定したわけですから、江戸の平和はこの三人の共同作品ともいえます。

しかし家康公がこの二人と決定的に違うところは、実に多くのブレンを次々と起用して政策の決定に関与させていることです。天海、崇伝、羅山、アダムズ、元結、大久保長安、茶屋四郎次郎をはじめ

人の一生、重荷を負て遠き道を行くが如し。急ぐべからず。不自由を常とおもへば不足なし。心に望みおこらば困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基。怒りは敵と思へ。勝つ事ばかり知りて負くる事を知らざれば、害その身に在る。おのれを責めて人を責むるな。及ばざるは過ぎたるより勝れり。

東照宮遺訓

慶喜書



徳川慶喜公書「東照宮遺訓」(茨城県立歴史館所蔵)。「人の一生は重荷を負て遠き道を行くが如し。急ぐべからず。不自由を常とおもへば不足なし。心に望みおこらば困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基。怒りは敵と思へ。勝つ事ばかり知りて負くる事を知らざれば、害その身に在る。おのれを責めて人を責むるな。及ばざるは過ぎたるより勝れり」。